

talk! talk! talk! 女優・野波麻帆さん



女優 野波麻帆さん

16歳のとき「東宝シンデレラ」グランプリを獲得しデビュー。以降数多くの作品に関わりながら、演技を、そして自分を成長させ続けてきた女優、野波麻帆さん。高校卒業をきっかけに始めたカメラは、今や野波さんにとってかかせないツールのひとつだ。すぐに忘れてしまいがちな日常を写真に残し、それが野波さんの大切な思い出になっているという。今回は撮影する側の視点、さらに撮られる側のエピソードも交えながら、カメラの楽しみ方をうかがった。

プロフィール

のなみ・まほ。1980年、東京都生まれ。1999年私立堀越高等学校卒業。趣味はカメラの他にも絵を描くこと。1996年、第4回「東宝シンデレラ」でグランプリに選ばれデビュー。1998年、映画「愛を乞うひと」（平山秀幸監督）に出演。新人ながらその演技が高い評価をうけ、日本アカデミー賞新人賞、助演女優賞など各賞を受賞する。その後映画、ドラマと数多くの作品に出演。2004年には「純獣」（宮藤官九郎作、河原雅彦演出）で舞台に初挑戦し、女優として活躍の幅を広げている。最近の主な出演作にドラマ「こちら本池上署シリーズ」（TBS系）「大奥 第一章」（フジテレビ系）「富豪刑事」（テレビ朝日系）、映画「Summer Nude」（飯塚健監督）「2LDK」（堤幸彦監督）などがある。

高校卒業を機に始めたカメラで 親友の写真集のフォトグラファーに!?

写真を撮り始めたきっかけはなんですか？

高校を卒業するときに、何か趣味を持ちたいなと思ってカメラを始めました。買いに行ったお店の店員さんに相談して、初心者ならこれがいいだろうと思ってニコンのマニュアル一眼レフカメラを買ったんです。

趣味になぜカメラを選んだのですか？

16歳でこの仕事を始めてからずっと撮られる立場にいたので、撮る側はどうやって見ているのかなと思って自分でも撮ってみようと思ったんです。ちょうど誕生日を迎えた友達がいたので、彼女をモデルに撮って、写真集を作ってあげたいなと思っていました。

写真集？

そうですね。朝からメイクをして、代々木公園や渋谷辺りに行って撮影しました。その写真を本にしてまとめて詩のような言葉も添えて、彼女の写真集としてプレゼントしました。とっても喜んでくれましたよ。私は前から女の子が撮りたいなと思っていたので、撮影していてとても楽しかったです。

女の子が撮りたかったというのは？

男の人の写真を見ていると、私はあまりピンとこないんです。でも女の子はかわいくてきれいだから、見るだけでもいいなと思うし撮っていても楽しい被写体なんですよ。だから、この写真を撮っているときも楽しくて興奮しちゃって（笑）。よく、仕事での撮影のときに「おー、かわいいね、今のいいね、いいね」って言いながら撮るフォトグラファーさんがいるんですけど、そうやって言いたくなる気持ちがとてもよくわかりました。私もついついそんなふうに言いながら撮ってしまったりして（笑）。

写真を撮ってみて、1番面白いと思ったのはどんなところですか？

目で見ているものと、レンズを通して写真になったものが全然違う、そのギャップが面白いなと思いました。それから、1番の親友である彼女の写真集を撮っていたとき、改めてカメラを向けてみたら今まで見たことのない表情や、私の知らない彼女の一面が見えたんです。それを感じたときに、ああ、人を撮るのってとっても楽しいなと感じました。

女の子を撮ってハマってしまった。

そうですね。本当にいろいろな表情が撮れたので。彼女も同じ芸能界で仕事をしているんですが、いつも身近にいる私がカメラを向けていたということで、彼女が仕事で見せていた表情とは違う、一番リラックスしたような表情をしていたんですね。彼女のこういう表情を私が引きだせたんだなって思うと、それもまた嬉しくて、とってもとっても楽しかったんです。



撮影はフォトグラファーと1対1の戦い「負けてしまった！とよく思います（笑）」

野波さんが仕事で写る側に回ったとき、フォトグラファーとどのようにコミュニケーションをとっていらっしゃるのでしょうか？



うーん.....コミュニケーションかどうかはわからないんですが、撮影のときというのは、何といいますが、フォトグラファーさんと1対1で戦っているような感じなんです。ここまでは見せるけれど、その後は見せたくないよっていうのが私にはあるんです。でもフォトグラファーさんからしたら、もっと見せてほしい、もっと違う一面が出てくるんじゃないかっていうのがあるんですよ。そのあたりの駆け引きというのが、本当に戦いなんです。もちろんそれは言葉で言うのではなくて、シャッターを切るタイミングだったり、その場の流れとか雰囲気とかなんですけどね。

写真に写るといのは自分を見せていくことなんですかね。

はい、自分の内側を見せることなんです。フォトグラファーさんでも、大御所と呼ばれるような篠山紀信さんやアラキーさんなどは、特にそうやって内側を引き出そう、引き出そうとします。私はそれが凄く嫌だと感じる時もあるんですけど、これは絶対に見せないぞと思うんですけど、それを引き出そうとする方もやっぱり凄いですよね。

では、引き出されてしまったときは、野波さんが戦いに破れたときということになりますか？

そうですね。あとでチェックのために写真を見ると、「うわ、ここまで見せてしまったのか、負けた！」と思います（笑）。それは本当によく思いますね。

そうやって内側を見せていくわけですから、写真を撮られるって結構恥ずかしいことなんです

よ。撮影中は感じないんですが、あとでチェックしたときや、終わって家に帰ったときなんかは、改めて「見せてしまった.....」って恥ずかしくなったりします（笑）。

（笑）でも、結局は見せてしまったときの写真の方が評判がよかったです.....？

いや、もう本当にその通りで、負けたときの方がいい表情だったりすることも多いんですよ。自分でも見たことのない顔をしていて驚いたり、こんな表情できるんだって思ったり、それは本当に面白いですよ。

でもそれも一概には言えなくて、自分でこういう表情を撮ってもらいたいと思ううまくいくこともあるし、全然ダメだったこともあるし、撮影って本当に難しいですね。

楽しかったことやきれいだなと思ったことは忘れたくない だから写真に撮って残す

普段はどんな風にカメラを楽しんでいるのですか？

普段の生活の中でちょこちょこ撮ることが多いですね。あとは旅行だったり、どこか遊びに出かけるときには必ず撮ります。それから撮るものとして、空は多いですね。いろいろな色があって、雲も「これが雲？」っていうような不思議な形をしていたり幻想的だったりして。空って本当にきれいだなと思うし、その空はその一瞬だけのものなのでそれを写真に残しておきたいと思うんです。

日常で目にするもののほとんどはどんどん忘れていってしまうから、そういうものを写真に残しておくことってとても大事だと思うんです。

忘れないために写真を撮りたいと思うのですか？

そうなんだと思います。忘れないことももちろんありますが（笑）、でも私は、きれいだなって思ったことや楽しかったことなどはずっと記憶の中に残しておきたいんです。忘れないために、定期的に記憶を思い返すことを心がけているんです。

でも思い返すだけではやっぱり少しずつ忘れてしまうから、そういうときには写真が必要なんです。あとで見返せるように、きれいなもの、楽しかったりうれしかったりした瞬間を撮ってあげたいと思うんです。その写真が支えになるし、元気が出るし、がんばらなきゃと思うこともあります。

写真を見るとより鮮明に思い出することができる？

はい、小学校のころのことだってちゃんと思い出せます。そう考えると、写真って本当に凄いなと思います。特に自分で撮るようになってからは、より鮮明に思い出せるようになりました。撮られている受け身の写真よりも、自分で撮った写真の方が、撮ろうという気持ちが前に出ているので、そのときの状況まで詳しく思い出せるんです。1枚の写真から、あのときこう話してこういことをやって笑ったんだとか、そういうものが全部思い出せることがとても素敵なことだと思います。

たとえば、以前沖縄の石垣島に旅行に行ったときにとても人なつこい男の子たちと出会ったんです。最初、何人かの男の子が遊んでいたんですが、みんな夕方になって帰って行って、2人だけが最後まで残っていたんですね。それで、向こうから話し掛けて来てくれて仲良くなって、私も1枚撮らせてって言って2人の写真を撮ったんです。その男の子の写真を見るたびに、そのときの様子、石垣島の暑さや空気の匂い、空の色も思い出します。

忘れることのない思い出なんですかね。

はい。その男の子たちが凄くいい表情をしてくれて、写真が出来たら後で送ろうと思って、住所を聞いて送ってあげたんですよ。カメラを持っていることで、こうやって現地の方とお話できたりするので、そういう意味では、カメラって優れたコミュニケーションツールでもあるんだなと思います。



家の近所で見えた夕焼け。
家への帰り道にきれいな空を見ると、
家にカメラを振り回して走ることも
あるそうだ

自然で良い表情を撮るなら撮る方も撮られる方もカメラに慣れること

撮るときにこだわっている点などはありますか？

どうでしょう？特に気にして撮ったりはしてないんですけど.....ただ、人を撮るときに記念写真みたいになるのは嫌だなと思いますね。写真の真ん中に「はい、並んでこっち向いて」っていう感じではつまらないと思うんです。

友だちが私を撮ってくれたときに「もっとこっち寄って」って言って、ファインダーの真ん中に立たせようとするんですよ。そういう写真を見ると「なんでいつも真ん中なの、つまらない！」って腹が立ったりします（笑）。もっと違う構図で撮ってみてよって言って、撮れていれればいいんだって言われたりするのですね、だったら私が撮るときはいろいろな角度から撮ってみようって意識はしています。横顔だったり、ちょっと動きがあるような写真を撮りたいです。あとは自然な表情をしていたり。

カメラを向けると急に意識して照れてしまったりして、表情が硬くなったり同じ笑顔になってしまったりする人もいますよね。

そうですね。特に大きくなるにつれて急に意識して照れたりするんですよ。子供のころは何の躊躇もなく写っていたのに、あれはなぜでしょうね？

でも、お友達を撮られた写真などを拝見していると、とても自然な表情を撮られていると思います。

彼女は撮られ慣れていたというのもあるんですが、それよりもずっとカメラを向けていたというのが大きいですね。そうすると相手も写ることに慣れるし、私もだんだんと撮ることに慣れていって、自然な表情を作れるようになったんだと思います。

もし自然な表情を撮りたいのなら、何枚も撮り続けてお互いカメラに慣れることがとても



ロサンゼルス旅行で撮影した1枚。
旅行先ではとにかく
たくさん写真を撮るとか

重要なんじゃないかと思います。どうしてもカメラを向けられると照れますし、カメラに見られて恐いなって思うときもありますからね。

撮られ慣れている野波さんでもそう思うのですね。

思いますよ。仕事だと割り切るとできるんですけど、普段向けられると照れちゃうときもあります。

仕事を始めたころはカメラに慣れなくて、撮影のたびに顔が硬直しちゃって目の下辺りがピクピクしていました。笑ったまま唇が乾いてしまって、口が閉じなくなったこともありましたよ。今はやっと平気になりましたけど、やっぱりそれも慣れなんですね。いい表情を撮るならまずは撮る方も撮られる方もカメラに慣れることですね。

今後、撮っていききたいものはありますか？

やっぱり人ですね。できるなら、知らない人をたくさん撮ってみたいんです。沖縄で出会った男の子たちみたいに、その人がどんな性格なのかもわからない、どんな風に考えていて今どうしてここにいるのか私は何も知らない。でも今、こうして出会って楽しく話しているっていう。そういう人を写真に撮りたいんです。

その人と仲良くなってもっと知りたいと思うけど、多分もう会わないそれっきりの人で、だから写真を撮らせてもらうという、そういう感じがすごく楽しいんです。そういう人の素敵な表情をたくさん撮れたらいいなと思います。



こちらロサンゼルスの写真。
海岸に並んだ十字架は、
イラクで亡くなった兵士ひとりひとりの
記念碑になっていたそうだ

どんなことでも楽しめるように、楽しく思えるようにしたい

女優という仕事の、1番の面白さはどこですか？

自分が思っていなかったような自分を発見できたり、改めて自分がこういう人なんだってわかったり、お芝居って対自分というか、自分のことを深く考えていくものなんです。だから、お芝居を始めてからずっと、自分探しをしているような感じなんです。仕事をしてきて自分がわかってきたし、逆にわからなくなったし(笑)、凄く難しい部分なんですけど、その自分探しがとても面白いんです。

それはたとえば、凄く情熱的な役柄を演じたときに、こんな激しい感情が私にもあったんだ、というような発見があったりすることですか？

そうです。前もって役作りをしていたのに、本番になったら新たな感情が生まれて全然違うお芝居をしていたり、相手役の人との絡みでまったく違う方向に行ってしまうたり、自分が想像していた以外の行動をとってしまったときというのは刺激があるし、楽しいです。

自分とは違う人を演じるわけですから、やっぱり最初は想像で演じていくしかないんです。でも、現場に入っているいろんな人と話して相手役の人と気持ちが通じ合ってくると、それがだんだんわかってくるんです。この人はこう思っていたんだってわかったその瞬間というのは、本当に楽しいです。

今後の夢や目標はありますか？

ドラマ、映画とやらせていただいて、去年初めて舞台を経験したんです。とにかく必死だったので、何も覚えていないし振り返りたくないという感じだったんですね。ところが半年以上たった最近になって、ふと思い出すようになったんです。あのときはこうすればよかったとか、なぜこうしなかったのかとか反省してみたり。映画やドラマのときは、その場ですぐ反省したり考えたりしていたのに、今になってわかってきたり反省したりするなんて、こんなことは初めてなんです。

舞台を通して凄くいい経験ができたんだって今は思っていますし、ドラマ、映画、舞台、それぞれのお芝居の違いが、なんとなくですがようやくわかってきたんです。まだまだわかりかけたところですが、ここから、さらにお芝居ってなんだろうって思えたらいいですし、それぞれをもっともっと楽しめたらいいなと思っています。

“楽しい”というのは、野波さんの中の重要なキーワードのようですね。

重要です！生きることは楽しいことだと思っていますから、どんなことでも楽しくないと絶対にダメですよ。楽しくないと思う時間ももたないじゃないですか。だから、とにかく楽しめるように、楽しく思えるようにしたいんです。辛かったらそれで終わりにしないで、次は楽しめるはずだと思う。新しいことにチャレンジするときも、不安だなんて思ったら私の性格上絶対にダメになってしまうから、楽しいことが待ってるぞ！って思って挑むんです。

この仕事はいつも新鮮で、楽しみながらできるんです。だから凄く好きだし、ずっとやっていきたいと思っている仕事なんです。そういう仕事に出会えたということは、私は本当に幸せものだなと思っています。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.